

『夜想曲』

「趣味は、ピアノを弾くこと」と言えた時期がありました。40代前半の3年程の期間です。残念なことに今は全く弾けません。実にもったいないことをしたと心から悔やんでいます。

「夜想曲」は、ノクターンとも言い、ピアノの独奏曲の仲間です。ノクターンと言えば、ショパンの曲が有名です（と、私は思っています）。とりわけ、No.2（変ホ長調）は、「あー、聞いたことある」と、多くの人が言われると思います。テレビのCMや電話待機中のBGMでも使われているとてもポピュラーな曲です。

「ピアノを弾けるのは、何かかっこいいな」とは、常々思っていました。が、「ピアノを弾きたい！」と強く思うようになった“きっかけ”の一つは、「101回目のプロポーズ」というテレビドラマで、主人公の男性が、好きな人のためにショパンの「別れの曲」を弾くシーンを見て感動したことが挙げられます。決して上手ではなく、たどたどしい演奏ではありましたが、主人公の想いがとても伝わってきました。「別れの曲」のメロディーも「いいもんだな」と思いました。そして、「自分も、あんなふうに弾けたらいいな」という憧れが少しずつ膨らんでいったように記憶しています。

もう一つは、家庭訪問での保護者との会話の中で「先生の夢は何ですか？」と訊かれた時に、「はい。ショパンのノクターンを弾けるようになることです」と、言ってしまったことです。

ここからの行動は素早かったと思います。早速、娘が通うピアノ教室の先生にお願いに行きました。「大人の方は、やったことがないのですが・・・」「いいです。やってみましょう」ということで、週に一度のレッスンが始まりました。

「何が弾きたいですか？」「ショパンの“別れの曲”です。簡易楽譜でお願いします」「別れの曲」は、1カ月程で最後まで弾けるようになりました。「もっとガチガチかと思いましたが、けっこう指が動きますね」「次は、何の曲にしますか？」「ショパンのノクターンを弾きたいです。今回も簡易楽譜でお願いします・・・」と言って帰りました。

家につくと、ある思いが湧き上がりました。「今回も簡易楽譜でいいのか？それがお前の願いなのか？」私は、居ても立っても居られなくなり、ピアノの先生に電話しました。「先生、ショパンのノクターンは原曲で弾けるようにしたいです！」「わかりました。次のレッスンまでに楽譜を用意しておきますね」

そして、ノクターンへの挑戦が始まりました。夏の頃だったと思います。

まずは右手のみでメロディーを、1日に1小節の半分くらい。1週間で1小節進めるかどうかという実にスローなペースでの練習でした。全く進まないこともよくありました。楽譜が読めないのが、音符の脇にカタカナをふりました。ある程度まで進むと、「じゃ、左手もやってみましょう」ということで、左手だけの練習をしました。左手は、伴奏パートを弾くので、三連符のオンパレード。指をどこに置くか、1音ずつ確かめながら進めました。「そろそろ、両手でやってみましょうか」と、2小節程、両手でチャレンジ。当然、

右手と左手のテンポがそろいません。「同時に両手を駆使するなんて自分にできるのか？」と、焦り、苛立ちながらも、必死でやりました。ようやくそろってきたかなと思った時、私の耳に、慣れ親しんだ曲の“出だしらしきもの”が聞こえてきました。出来はまだまだでしたが、「あ、ショパンのノクターンだ！」「自分が弾いているんだ！」と、とても嬉しくなりました。

11月頃だったと思います。先生から「来年2月に『あなたのためのメモリアルコンサート』というものがあるのですが、それに出てみませんか？」と勧められました。私は、以前、札幌のコンサートホール「キタラ」が、独りでホールのピアノを弾ける（もちろん観客はなし）有料サービスをテレビで見たことがあったので、同じようなものかなと想像し「はい。やってみます」と答えました。その時点では、まだ、曲の3分の1が残っていました。

次のレッスンから、先生の指導が突然厳しくなりました。曲の完成度を求めるようになったのです。「なぜ？間違っても、たどたどしくても、それなりに最後まで弾ければいいでしょ」と、大きな戸惑いを覚えました（後になってから、その理由がわかりましたが）。

1月下旬頃には、「どんなノクターンが弾きたいのですか？」と、問われました。逡巡しましたが「アシュケナージのようなノクターンが弾きたいです」と、答えました。アシュケナージは、家でよく聞いていたCDの演奏者の名前です。

何度も、ダメ出しされました。2月に入っても、先生からOKは出ませんでした。そして、本番2週前のレッスンでようやく「今のは、良かったです。どんなノクターンでしたか？」「自分のノクターンを弾きました」「それでいいです」

2000年2月20日、当日。ついに、本番。出場者30名程。何と、1階の客席は、ほとんど埋まっていました。あの「キタラ」方式ではなかったのです。多くの人の前で発表でした。私は、動揺しました。出演順は7番。「ラッキーセブン」だと言い聞かせ、ステージ袖で自分の番が来るのを待ちました。「とにかく、椅子に座っても、すぐに弾いてはいけません。深呼吸し、ゆっくりと最初にタッチする位置を確かめます。ペダルの具合も確かめ、さらに一呼吸おいてから弾き始めてください」との先生の教え通りに振舞いました。ステージ照明のせいで首筋が熱かったことは今でもありありと覚えています。心臓はバクバク。指も膝も震えていましたが、何とか順調に進みました。不思議なことに、これまでの練習で、どうしても上手くいかなかった難所もクリアできました。「これで行ける」と思ったのがまずかったのでしょうか。これまで間違ったことのないラスト前の小節でつまずきました。やり直しても、またミスったので、そのまま終わりまで行きました。

礼をし、袖に戻ろうとしたら、袖口にいた運営者のIさん（私のピアノを調律されている方）が客席を指さしました。何だろうと見ましたら、ステージ下に花束を持ったピアノの先生の娘さんがいました。サプライズでした。そして、袖に戻るやいなや、私はIさんと抱き合いました（おじさん二人で）。「Iさん。やったよ」目には涙がにじんでいました。

子どもの成長する姿を見て感動することは職業柄よくありました。でも、たまには、自分のことで感動することがあっていいなと思いましたし、生きていく上で大事なことだなとも思っています。